

明治神宮宮域林の植物社会学的研究

Pflanzensoziologische Untersuchungen
in den Wäldern des Meiji-Schreins in Tokyo

宮脇 昭・奥田重俊・井上香世子

von

Akira Miyawaki, Shigetoshi Okuda u. Kayoko Inoue

1980

明治神宮境内総合調査報告書別刷269～333頁

Sonderdruck aus:

Interdisziplinäre Untersuchungsergebnisse über den Meiji-Schrein p.269-333

明治神宮宮域林の植物社会学的研究

Pflanzensoziologische Untersuchungen
in den Wäldern des Meiji-Schreins in Tokyo

宮脇 昭・奥田重俊・井上香世子

von

Akira Miyawaki, Shigetoshi Okuda u. Kayoko Inoue

1980

明治神宮境内総合調査報告書別刷269～333頁

Bericht der Gemeinsamstudien über den Meiji-Schrein p.269-333

植生調査報告書

明治神宮宮域林の植物社会学的研究

宮 脇 昭

明治神宮宮域林の植物社会学的研究*

Pflanzensoziologische Untersuchungen
in den Wäldern des Meiji-Schreins in Tokyo

宮脇昭・奥田重俊・井上香世子

von

Akira Miyawaki, Shigetoshi Okuda u. Kayoko Inoue

横浜国立大学環境科学研究センター植生学研究室

Abteilung für Vegetationskunde des Instituts für

Umweltwissenschaft, Staatliche Universität

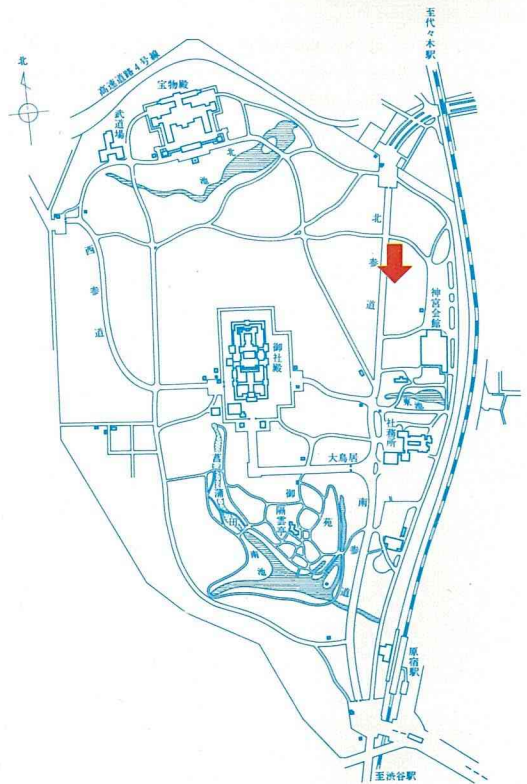
Yokohama/Japan

1980

* Contributions from the Department of Vegetation Science, Institute of Environmental Science and Technology, Yokohama National University No.101



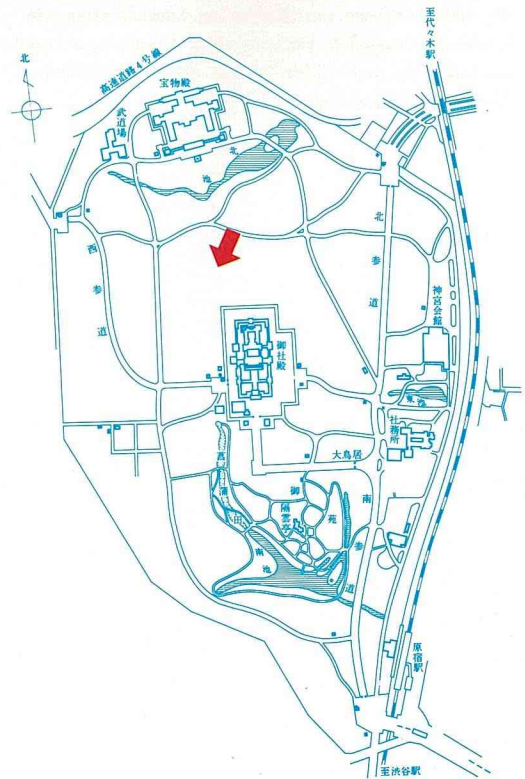
常緑広葉樹の樹冠におおわれ森厳さを保つ参道(北参道)
 Mit dichten Kronen von immergrüne Laubholzarten wie
Castanopsis cuspidata var. *sieboldii*, *Cinnamomum camphora*,
 u.a. bedeckter weihvoller Zugang sum Meiji-Schrein
 (Nördliche Zugangstrabe).





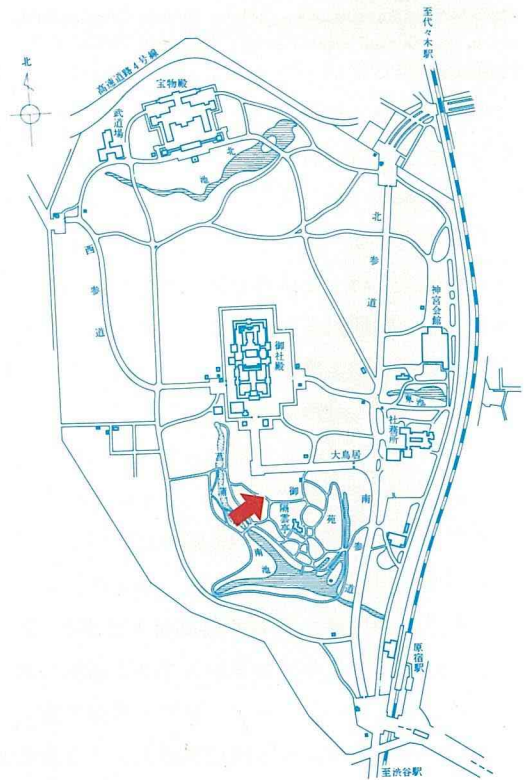
最も発達した常緑広葉樹林のクスノキ-スダジイ群落の林内相観(本殿北部)

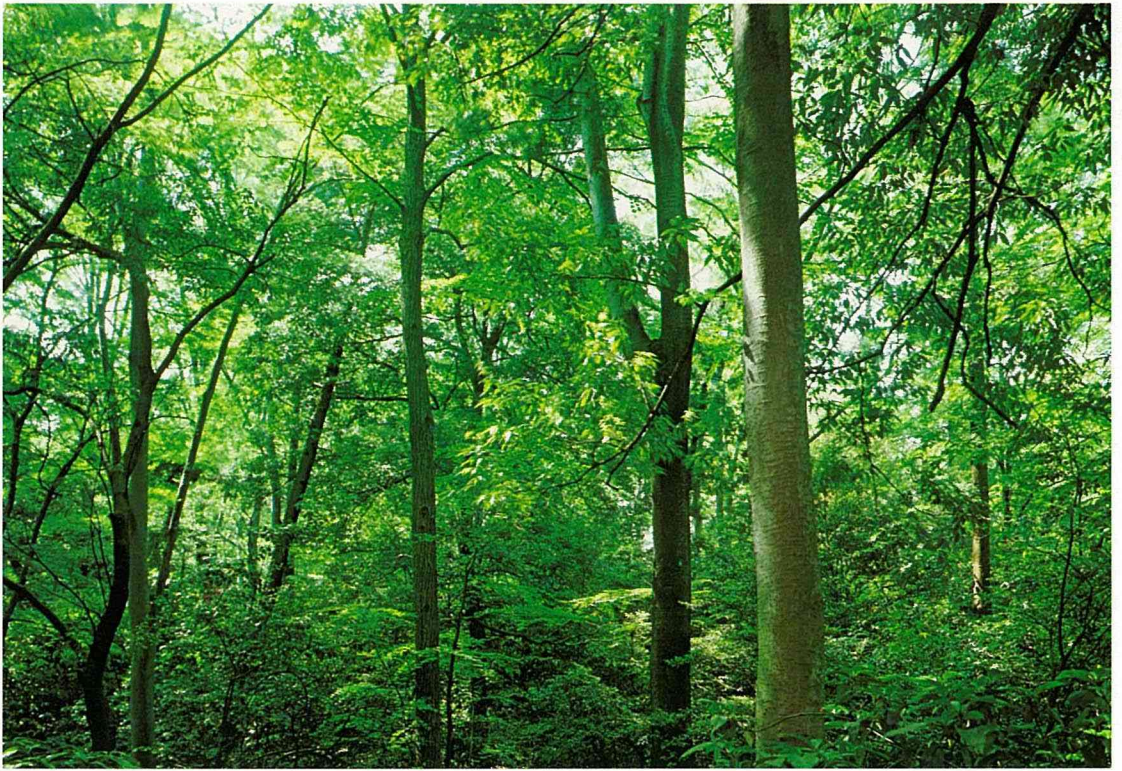
Einer der am besten entwickelten immergrünen Laubwälder der *Cinnamomum camphora*-*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii*-Gesellschaft(Nördlich des Schreins).



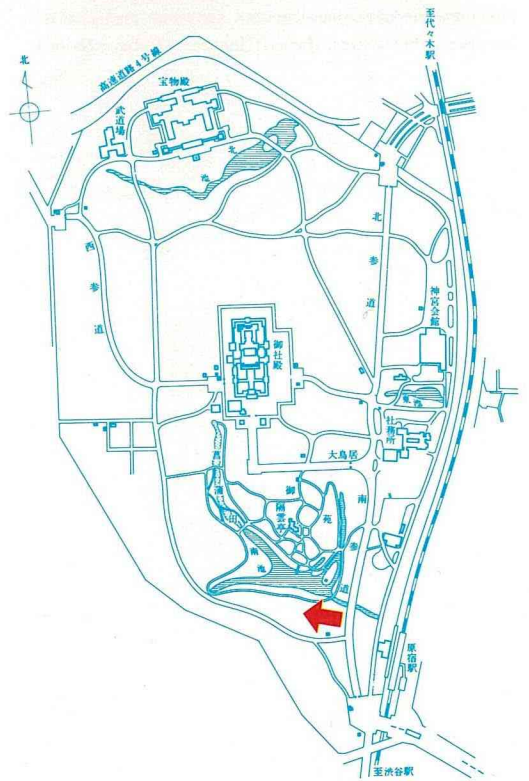


夏緑広葉樹林のイヌシデ-コナラ群落の相観(内苑)
 Physiognomie der sommergrünen *Carpinus tschonoskii*-
Quercus serrata-Gesellschaft (Innerer Garten=Naien).





凹状地に生育するイヌガヤクヤキ群落の林内相観(南池付近)
Cephalotaxus harringtonia-Zelkova serrata-Gesellschaft,
 die in den Senken wächst(beim "Südlichen Teich" =
 Minamiike).



はじめに

世界の文明や都市の発展、衰亡の歴史を見ると、かつての文明や都市の中心地の大部分は今日砂漠や荒野と化している。本来、メソポタミヤ、エジプト、ギリシャも、日本文化の基盤として東北地方南部から沖縄まで、国土の大部分を被っていたと同じ、冬も緑の常緑広葉樹林の中やまわりに発展した。ただ、冬雨地域の地中海地方の自然植生は、コルクガシや *Quercus ilex* などを主とする硬葉樹林である。一方わが国のはタブノキ、シイ、カシ類を主とする照葉樹林あるいは、ツバキの花咲くヤブツバキクラス林と呼ばれている。

西欧文明の発祥の地と言われる地中海地方では、文明や都市の発達に伴い郷土の緑を破壊、消滅させることによって、文明の担い手も交代し、その中心地や都市も常緑広葉樹林帯から、冬は葉の落ちる夏緑広葉樹林帯に属する中部ヨーロッパのヨーロッパミズナラ、ヨーロッパブナ林域へと移行した。さらに大西洋を越えて、アメリカ東部などのサトウカエデ、アメリカブナ林域に移行して現在に至っている。

ところが、わが国ではこのかぎられた島国で、かつての首都であった奈良、京都あるいは鎌倉に象徴されるように、郷土の森を残し、同時に積極的に形成してきた。長い間の日本人の生き方は、それが経験的かあるいは思考錯誤を重ねた結果得られた知識にもとづくものか、新しい集落や都市づくりに際して、決して西欧文明の歴史が示すような郷土の森を破壊しつつしての自然の画一化・貧化を強要しなかった。

むしろ、日本人の自然利用の歴史は、新しくつくられる都市や生活域の中には人間の心と健全な生活のよりどころを、人間生存に際しての永遠の本質的共存者である郷土の植物によって、重点的

に郷土の森を形成してきた。その具体的な姿が、わが国の各地、とくに古い町や村に見られる、いわゆる鎮守の森である。わが国独特の神社のまわりを聖域として郷土の森が形成された理由については、宗教的、文化的、社会的、自然科学的、さらに広く各分野、立場から、いろいろと意見が出されるであろう。自然を同時に神の座として畏敬したためか、むしろ自然の崇りを恐れてか、あるいは、人間の心の基盤として、災害防止林としてなど様々な根拠が考えられ、あるいは批判もある。

しかし、我々の祖先が、結果的にはどんな町にも村にも、積極的に自然度の高い山地や海岸、人間の干渉に敏感な尾根部、急斜面、水源地、水ぎわなどに郷土種による郷土の森を形成してきた事実こそ、注目されなければならない。

現実に我々が日本各地の植生調査を行なっていると、低山地、丘陵部などのいわゆる里山のほとんどすべては二次林、二次草原で占められている。その土地本来の自然植生を支持し得る能力——潜在自然植生——の、今日顕在している植生としての自然林の残存林分は、むしろ、古くから生きのびてきた都市、町、集落の中やまわりに残されている。最も多く、しかもその土地固有の潜在自然植生に近い自然ないし、半自然生植分は神社林である。次いで寺院林、古い屋敷林、墓地のまわりの樹林などがあげられる。

沖縄県の御願所^{うがんじゆ}、本州、四国、九州の各地に、おそらく20万箇所以上の社寺林が形成されてきているはずである。たとえば、神奈川県下だけで3,000箇所近くある社寺林は、最近の自然開発、宅地、道路づくり、はては見かけ上の管理によって急速に破壊・消滅させられている。今日なお郷土の森として比較的自然度の高い樹林が残されて

いるのは約40箇所にすぎない（宮脇他，1979）。

伊勢神宮，大分県の宇佐神宮，名古屋の熱田神宮，秋田県の日本海岸沿い北限近くの本荘市御嶽神社のタブノキ林などの例をとるまでもなく，わが国各地の文化の中心は神社や神社林であったといっても過言ではない。各地に宗教的な聖域意識，自然の畏敬意識と結びついて形成されたと考えられる日本の伝統的手法で各地に郷土の森が残され，つくられてきた。

数百年あるいはそれ以上の長い間，つくられてきた郷土種による郷土の森の最後の，そして，現代の生態学や植物社会学の立場から見ても，潜在自然植生に対応した，最後の本格的な都市林，環境保全林としての機能も十分に果たす森が形成されたのは明治神宮林である。後述されるように，全国各地からの十数万本の献木を当時の雑木林の疎林や墓地であった今日の明治神宮林域に，比較的うまく立地条件に適合した神宮林が形成されるように長期計画にそって植林された。

50年を経た今日では，都市砂漠とさえ極言される東京都区内のほぼ中央部に自然林に近い形の，シイ，タブノキ，クス，カシ類などの常緑広葉樹を主とした見事な神社林が形成されている。明治神宮林は今や単に明治神宮の壮厳さを助けるばかりではなく，首都圏3,000万人近くの人たちの緑の保養所，火事や地震などの突発の災害に対しては，逃げ場所，逃げ道などの避難場所，防災林の役割を果たすはずである。さらに最近の，いわゆる公害，汚染などの環境破壊に対しては，単に吸音，集じん機能を果たすばかりではない。植物は移動能力がないので，どれほど精巧な物理・化学的な測定器具でも測定不可能な，現在未知の，あるいは計量化が困難な要因も含めて，生命の側からの総合的な環境の変化，破壊の生きた警報装置として，きわめて敏感な機能を果たしている。

現在各地で問題になっている自然破壊，いわゆる公害問題は，根本的には，長い間のわが国固有

の多様な自然環境の中で，新しい町づくり，生活環境立地づくりの基本を無視してること起因している。郷土の森の創造を前提としてきた泥くさくさでも間違いの少ない生き方を否定し，神を忘れて，非生物的材料によるせつな的な経済の向上，あらゆる便利さと欲望の充足だけを旨とした生活態度，産業立地や都市形成，自然開発の結果がもたらした当然の結果といえよう。

我々が健全な心と体を基礎に明日を生きのびるためには，どれほど大きな都市や効率の良い産業立地でも，その中やまわりに人間の本質は共存者——植生——によって，日本民族が1,000年以上以前から町でも村で行ってきた積極的な郷土種による環境創造を具体的に実施しなければならない。

明治神宮林こそは，日本人が国民の総意によって形成した最後の郷土林である。同時に，環境の危機が叫ばれている今日こそ，新産立地や大都市に形成されなければならない，多様な機能を果たす，新しい時代に対応した古くて新しい環境保全林形成のための生きた見本である。

創立50周年を迎えた明治神宮では，当時の伊達巽宮司をはじめ関係者各位の，新しい時代に対応した神社林，都市林形成のための生きた実例として，総合的な調査が計画され，3ケ年の現地調査が実施された。我々は植生調査と植生図の作製を担当してきた。

まだ不十分な点もあると考えられるが，ここに今まで得られた調査成果を概報したい。本調査を依頼され，種々御鞭撻を与えられた明治神宮伊達巽前宮司，高沢信一郎宮司に厚くお礼申上げたい。また，多くの関係者の方々の長い間の積極的な御援助，御好意に深謝したい。

とくに，現地調査から本報告のとりまとめにいたるまで，個々の細かい問題にまで御協力・御尽力戴いた内田方彬林苑技師をはじめ，各面で御協力戴いた神宮関係者の皆様に謝意を表したい。

現地調査や資料のまとめに際して，横浜国立大

学環境学科研究センター植生学研究室の藤原一絵、
原田洋、鈴木邦雄、佐々木寧、堀田一弘、高藤郁

子、上野節子、前田文和氏をはじめ多数の方々の
お世話になった。皆さんにお礼申しあげたい。